

花のお江戸を歩く会

これがホントの神楽坂散歩

「九段坂周辺～東京大神宮～神楽坂周辺」

＜散歩道のご案内＞

今回歩く九段坂周辺の旧飯田町～神楽坂周辺地域は、江戸城を防備する武士階級の町でした。特に牛込橋御門は徳川家康が軍事的に重要視した上州道（群馬・長野方面）に対応した御門です。御門につながる神楽坂は、今は東京で女性に一番人気の繁華街です。

しかし江戸時代は、神楽坂の両サイドは江戸城を守るための旗本・御家人の屋敷が立ち並ぶ武士の町でした。坂上には、幕府初期の大老「小浜藩主：酒井忠勝」の4万2千坪の中屋敷が配備されました。この屋敷には忠勝の盟友小堀遠州が丹精を込めて作った日本庭園がありました。忠勝に信頼を寄せる徳川家光は140回も江戸城を出て酒井忠勝の屋敷で遊んだそうです（茶会とか鷹狩とか）。

様々な江戸の歴史を街に染み込ませた「神楽坂」を普段とはチョット違った目線で歩いてみましょう。これがホントの神楽坂散歩です！！

＜散歩道の順路＞

九段下駅→蕃書調所跡（東京大学の前身）→九段会館（東都戒厳令本部）→中坂→筑土神社（平将門鎮魂社）→靖国神社→硯友社跡（尾崎紅葉・明治期の文学結社跡）→冬青木坂（もちのき）→フィリッピン大使館→暁星小学校→二合半坂→東京大神宮→牛込御門→外堀通り→庚嶺坂→東京理科大資料館→若宮神社（源頼朝下馬宿願）→神楽坂→善国寺→藁坂→牛込城跡→袖振坂→朝日坂→尾崎紅葉旧居跡→酒井忠勝屋敷跡→赤城神社（牛込総鎮守・大胡氏ゆかり）→相生坂→白銀公園→御殿坂筑土八幡（平安時代の古社）→三年坂→本多横丁→かくれんぼ横丁→芸者新道→神楽坂（若宮八幡神社の神楽が聞こえたとか）→検番→熱海新道→小栗横丁→神楽坂→解散（JR飯田橋駅へ）

＜個別ガイド＞

① 蕃書(ばんしょ)調所跡(東京大学の前身)

蕃書というのはいわゆる洋書のことで、蕃書調所は江戸幕府によって設立された幕府直轄の洋学研究教育機関です。1853年（嘉永6年）のペリー来航以後、蘭学にとどまらない洋学研究の必要性を痛感した江戸幕府は、洋式軍事技術導入や外交上の要請から、当時の老中・阿部正弘のもとで開設が計画されました。

創設にあたっては、官学最高の地位にあった儒学者の林大学頭から横やりが入り、「野蕃」の字がつけられたといわれています。

② 滝沢馬琴旧居跡

滝沢馬琴は、江戸時代の著名な小説家。『南総里見八犬伝』の作者として知られています。

寛政5年(1793)27歳で当時飯田町中坂と呼ばれたこの地の履物商伊勢屋に婿入りし、58歳で神田同期町に移るまでここに住んでいました。付近に立つマンション入口に井戸枠が設置されています。東京都の旧跡に指定されています。→**晴橋**

③ 九段会館(東都戒嚴令本部)

昭和9年に建てられ、昭和の歴史をつくってきた希少性の高い建物である。歴史的には、昭和11年に、2.26事件の戒嚴司令部が置かれ昭和史の舞台となり昭和12年には、満州国皇帝の溥儀の弟・溥傑が結婚式を挙げたことでも知られる。戦後にGHQ接收後は、日本遺族会が運営していたが東日本大震災で天井が落下、現在は閉鎖している。

建築的には、帝冠様式という日本固有の建築様式をもつ外観である。帝冠様式の代表作といわれ、大胆な配色と重厚で凝った意匠が特徴。また、昭和初期の建設技術を知る上でも貴重な建物である。この歴史的、文化的、景観的にたいへん重要な建造物を75m程度の高層ビルとして建て替えられるという。→**清水門→北の丸公園→田安門→靖国神社(大鳥居を仰ぎ見るだけです)**

④ 筑土神社(平将門鎮魂社)

天慶3年(940)に現在の大手町周辺の観音堂に平将門を祭り津久戸大明神と称したのがはじまりといわれています。江戸城築城後の文明10年(1478)には、太田道灌が江戸城の乾(北西)、田安台に鎮守として社殿を造営しました。田安明神、江戸明神と呼ばれた時期もあり、山王・神田明神とともに江戸三社の一つに数えられました。神社の位置は田安、牛込、筑土八幡町、富士見へと移り昭和29年に現在地に移転しました。

境内に区指定有形民俗文化財の力石、狛犬があります。本殿前の狛犬は、安永9年(1780)奉納の区内最古のものです。→**中坂**

⑤ 硯友社(尾崎紅葉・明治期の文学結社)

この地に明治時代の文学結社、硯友社の社屋がありました。硯友社は、明治18年(1885)2月、尾崎紅葉・山田美妙・石橋思案らで結成され、回覧雑誌「我楽多文庫」を発刊、明治21年(1888)市販されるにおよび明治20年代の文壇に多くの影響を与えました。同人には、川上眉山、巖谷小波・広津柳浪らも参加しています。明治30年代以後衰退し、紅葉の死によって消滅しました。→**冬青木坂(もちのき)→フィリピン大使館→暁星小学校**

⑥ 二合半坂(酔っ払い坂)

この坂は二合半坂と呼ばれています。名前の由来は諸説あります。『再校江戸砂子』という史料には、日光山が半分見えるためと書かれています。なぜ「日光山が半分見える」と「二合半」になるのでしょうか。このことについて、『新撰東京名所図会』という史料での考えを紹介しましょう。富士山は麓から頂上までを十分割して一合・二合・・・と数えますが、西側に見える富士山と比べると日光山はその半分の高さ(五合)に見え、その日光山がこの坂からは半分しか見えないので五合の半分で二合半になるという考えです。この他に、あまりに急な坂であるため一合の酒を飲んでも二合半飲んだ時のように酔ってしまうからという説もあります。

⑦ 東京大神宮(女性人気NO1)

東京における伊勢神宮の遥拝殿として明治 13 年に創建され、「東京のお伊勢さま」と称され親しまれている。最初日比谷の地に鎮座していたことから、世に「日比谷大神宮」と称されていた。関東大震災後の昭和 3 年に現在地に移ってからは「飯田橋大神宮」と呼ばれ、戦後は社名を「東京大神宮」と改め今日に至る。現在広く行われている神前結婚式は、同社の創始によるものであり、今も神前において伝統的な結婚の儀式を守り伝えている。

⑧ 牛込橋

牛込橋は富士見二丁目から新宿区の神楽坂に通じる早稲田通りにある橋になります。ここには昔、江戸城内郭外郭の城門にあたる牛込見附があり、寛永 16 年(1639)に建造されました。上州道への要衝にあたり、別名「楓の御門」とも呼ばれていたそうです。門は明治 35 年(1902)に撤去されました。現在は、わずかに石垣の一部が道路の両側に対の形で残されています。→外堀通り→東京理科大学資料室

⑨ 庚嶺坂(ゆれいざ)

江戸初期、この坂のあたりが美しい梅林であったため、二代将軍秀忠が中国江西省の梅の名所大ゆ嶺に因み命名したと伝えられる。別名「若宮坂」「行人坂」「祐玄坂」とも呼ばれる。(神楽坂は元禄時代以降のさかで、その以前は庚嶺坂が中心の道だったそうです)

⑩ 若宮神社(源頼朝下馬宿願)

若宮八幡神社は、新宿区若宮町にある八幡神社です。若宮八幡神社は、源頼朝が文治 5 年(1189)奥州藤原征伐の際に当地で宿願、奥州平定後に鎌倉の若宮八幡宮を移して仁徳天皇を鎮座したのを創始とするといえます。文明年間(1469-1487)には太田道灌が江戸城鎮護のため、当社を江戸城に相對させた形で再興させたといえます。

⑪ 神楽坂

「神楽坂」の名称の由来について、この坂の右側に高田穴八幡の旅所があり、祭礼で神輿が通るときに神楽を奏したからとも、「若宮八幡社」の神楽の音がこの坂まで聞こえたからともいわれる。また、「改撰江戸志」には、津久戸明神が元和の頃に牛込の地に移転した時、神輿が重くてこの坂を上ることができなかったが、神楽を奏すると、容易に上ることが出来たため、この時より「神楽坂」の名が付いたと記され、様々である。

⑫ 善国寺

善国寺が創設されたのは、桃山時代末の文禄 4(1595)年で、今からおおよそ 400 年を遡る。初代住職は佛乘院日惺上人と言い、池上本門寺十二代の貫首を勤めた方である。上人は、二条関白昭実公の実子であり、父の関係で徳川家康公と以前から親交を持っていた。

上人が遊学先の京都より、本門寺貫首として迎えられてから九年後の天正 18(1590)年、家康公は江戸城に居を移し、二人は再会することになった。そこで上人は、直ちに祖父伝来の毘沙門天像を前に天下泰平のご祈祷を修した。それを伝え聞いた家康公は、上人に日本橋馬喰町馬場北の先に寺地を与えさらに鎮護国家の意を込めて、手ずから『鎮護山・善国寺』の山・寺号額をしたためて贈り、開基となられた。ここに毘沙門天を奉安する、名

刹・善國寺が誕生したのである。

徳川家の中で、法華経への信仰が厚いといえば、それは黄門様で有名な水戸光圀公である。光圀公も、善國寺の毘沙門天様に信をお寄せになり、寛文 10 (1670) 年に焼失した当山を麴町に移転し、立派に再建されたのである。この縁由により、爾来当山は徳川ご本家、並びにご分家の三郷のうちの田安・一橋家の祈願所となったのである。

当山はその後も享保、寛政年間と類焼の厄にあい、殊に寛政 4 (1792) 年の火事により、当、神楽坂へ移転してきた。今から約二百年前のことである。毘沙門天様への信仰は時代とともに盛んになり、將軍家、旗本、大名へと広がり、江戸末期、特に文化・文政時代には庶民の尊崇の的ともなり、江戸の三毘沙門の随一として、《神楽坂毘沙門》の威光は倍増していった。

当初は殆ど武家屋敷だけであった神楽坂界限も、善國寺の移転に伴い、麴町より、よしず張りの店が九軒当寺の門前に移転するなど、除々に民家も増え、明治初期に花街も形成され、華やかな街になっていった。→霧坂(わらざか)

⑬ 光照寺(牛込城跡)

光照寺一帯は、戦国時代この地域の領主であった牛込氏の居城があったところである。堀や城門、城館など城内の構造については記録がなく詳細は不明であるが、住居を主体とした館であったと推定される。牛込氏は赤城山の麓上野国(群馬県)勢多郡大胡の領主大胡氏(おおごし)を祖とする。天文年間(1532~55年)に当主大胡重行が南関東に移り、北条氏の家臣となった。天文 24 年(1555 年)重行の子の勝行は姓を牛込氏と改め、赤坂、桜田、日比谷付近も含めて領有したが、天正 18 年(1590 年)北条氏滅亡後は徳川家康に従い、牛込城は取り壊される。現在の光照寺は正保 2 年(1645 年)に神田から移転してきたものである。

なお、光照寺境内には新宿区登録文化財「諸国旅人供養碑」、「便々館湖鯉鮒の墓」などがある。→袖摺坂→朝日坂

⑭ 尾崎紅葉旧居跡

尾崎紅葉がこの地に住んだのは、明治 24 年 2 月、二十五歳のときからです。紅葉が当時盛んになってきた言文一致の文章を用いたのが、『二人女房』(同年 8 月一)からであるから、紅葉なりの新しい文体は牛込移住と並行してはじまったといえます。

その後『心の闇』(明治 26 年)、『青葡萄』(同 28 年)などの代表作を生み、同 29 年 2 月からは、言文一致の労作『多情多恨』を執筆。翌年 1 月に書きはじめた『金色夜叉』の完結をみず、同 36 年 10 月 30 日この地に没した。紅葉の家は鳥居家となっているが、紅葉がふすまの下張りにした俳句が二枚残っています。それは「初冬やひげそりたてのをとこぶり十千万はしたもののいはひ過ぎたる雑煮かな十千万堂紅葉」というもの。十千万堂とは、緑山・半可通人などとともに紅葉が用いた号です。

⑮ 若狭小浜藩酒井家牛込屋敷(現:矢来公園)

江戸城外濠の牛込見附門を起点に神楽坂通りを上り、毘沙門天善國寺の前を通り赤城神

社の左先に広大な若狭小浜藩江戸屋敷が見える。寛永 5 年 3 月に拝領された牛込下屋敷 4 万 3 千 5 百坪である。以後、この屋敷に 100 回に及ぶ将軍家光のお成りが記録されている。寛永 16 年 8 月 11 日、江戸城本丸の火災で将軍家光が酒井家牛込下屋敷に避難してきた。このとき広大な屋敷の周りに土手を築き、張り巡らせた竹矢来の前で抜き身の槍を持った家来衆が昼夜警護にあたった。忠勝は以後、屋敷に塀を設けず竹矢来を酒井家の家宝として残した。これが地下鉄東西線「神楽坂駅」一帯に広がる「矢来町」名の由来である。

また、「解体新書」を著した蘭学者で小浜藩医でもあった杉田玄白は、享保 18 年 (1733) に牛込矢来屋敷で生まれた。矢来公園には小浜藩邸跡、杉田玄白生誕地の石碑がある。

⑩ 赤城神社(牛込総鎮守・大胡氏ゆかり)

伝承によれば、正安 2 年(1300 年)、後伏見天皇の創祀に際して、群馬県赤城山麓の大胡の豪族であった大胡(おおご)彦太郎重治が牛込に移住した時、本国の鎮守であった赤城神社の御分霊をお祀りしたのが始まりと伝えられています。

その後、牛込早稲田の田島村(今の早稲田鶴巻町 元赤城神社の所在地)に鎮座していたお社を寛正元年(1460 年)に太田道灌が神威を尊んで、牛込台(今の牛込見付附近)に遷し、さらに弘治元年(1555 年)に、大胡宮内少輔(牛込氏)が現在の場所に遷したといわれています。この牛込氏は、大胡氏の後裔にあたります。

天和 3 年(1683 年)、徳川幕府は江戸大社の列に加え牛込の総鎮守と崇め、「日枝神社」「神田明神」と共に、「江戸の三社」と称されました。この三社による祭礼の際における山車、練物等は江戸城の竹橋から内堀に入り半蔵門に出ることを許されていました。→相生坂→

→白銀公園→御殿坂

⑪ 筑土八幡(平安時代の古社)

嵯峨天皇の時代(809 年・823 年)に、付近に住んでいた信仰心の厚かった老人の夢に現われた八幡神のお告げにより祀ったのが起源であるといわれている。その後、円仁(慈覚大師)が東国へ来た際に祠を立て(850 年前後)、伝教大師(最澄)の作と言われた阿弥陀如来像をそこに安置したという。その後、文明年間(1469 年・1487 年)に当地を支配していた上杉朝興によって社殿が建てられ、この地の鎮守とした。上杉朝興の屋敷付近にあったという説もある。

元和 2 年(1616 年)にそれまで江戸城田安門付近にあった田安明神が筑土八幡神社の隣に移転し、津久戸明神社となった。その後、1945 年に第二次世界大戦による戦災で全焼。明神社の方は千代田区九段北に移転し、築土神社として現在に至る。八幡神社の方は現在でも当地に鎮座している。→三年坂→本多横丁→かくれんぼ横丁→芸者新道→神楽坂(周辺神社の神楽が聞こえたとか)→検番→熱海新道→小栗横丁→居酒屋:竹子(懇親)→解散(JR飯田橋駅へ)